

《巻頭言》

柳田國男の「子ども観」に学ぶ

本学子ども教育学科1年生秋学期必修科目の一つに「教育コミュニケーションⅠ（基礎）」がある。授業の概要は、「最初に、教育の現場で必要なコミュニケーションとは何かを理解し、教育者として子どもとのコミュニケーションをとるためには、どのような方法や環境設定が必要かを理解する。つぎに、子どもの発達に応じたコミュニケーション能力とは何かを理解し、子どもが喜びを味わい自発的に行うコミュニケーションに向けて、ことばの受け止め方や聞き取らせ方・環境の整え方等の基礎的技能や態度を実践的な演習を通して身につける」というものである。ある時、私は学生たちにこう問いかけてみた。

「子どもの言動をとらえて大人はよく、『子どもらしいね』というよね。どんな時言うかな？（ア）一番よく使う時の意味と、（イ）余り使いたくないが、つい言ってしまう時の意味を考えてごらん。」学生の反応は、以下の通りである。

（ア）・純粋なことを言っていたり、ファンタジーな遊びをしている時・元気一杯遊んでいる時・子どもが子どものように振舞っている時・無邪気に遊んでいる時・ぬいぐるみに話しかけている時・素直に感情を表している時・かわいらしい振る舞いをした時・自由に自分の思うままに行動している時・食べ方が汚い時・泣きじゃくっている姿を見た時 etc.

（イ）・わがまま言っている時・駄々をこねている時・甘えたりした時・大人の目線で子どもを見下しているような言い方をする時・生意気な振る舞いをした時・子どもが言ったことが大人には思いつかないことだった時・子どもが大人から見るとすぐにばれてしまうような嘘をついた時・大人の顔をうかがう時・大人に対して気を使う子 etc.

このような回答から、学生個々の子ども観・子育て観を垣間見ることができる。それが、（ウ）「みんなが『子どものくせに・・・』という時はどんな時？」と問いかけると、より鮮明に出てくる。

（ウ）・化粧など大人がするようなことをした時・親に反抗した時・大人を馬鹿にしたような言い方をした時・大人に気を遣いすぎる時・大人ぶっている時・外で遊ばないで、家の中でゲームやゴロゴロしている時・自分の子ども観に合わない子どもの言動に対していう・自分よりも人生経験が幼いはずなのに生意気なことをいう時 etc.

ところで、民俗学者・柳田國男の一文に「子供の嘘」（「全人」第26号 1928年 イデア書院発行）がある、これは、当時、成城学園の保護者であった彼が、「母の会」で行った講演内容を雑誌編集部が口述筆記したものである。

「子供が一寸でも嘘を言ふと、すぐにも大泥棒になるやうに考へてお母さんといふものは道德の管理者になつてしまふ」のです。しかし、「子供の嘘は、その知力・想像力の成長を示す」ものです。「叱り飛ばさしないで、微笑して眺めてゐればよいのです。嘘を言ふと笑はれるものだと思ふことが一番よい方法です」・「正面から禁圧しますと、想像力が伸びなくなります」と、実に奥深い子ども観である。

2012年3月

子ども教育学会

会長 竹下 昌之